

ハボタンが着色する昼温及び夜温の条件

ハボタンは秋冬季の気温の低下に伴い葉が着色するが、着色する気温の条件は明らかでない。そこで、ハボタンが着色する昼温及び夜温の条件を調査し、着色には、昼温20℃以下、夜温10℃以下の条件が11日以上続く必要があることが明らかとなった。

内容

ハボタンは着色した葉を觀賞する花壇苗で、秋冬季の気温の低下に伴い着色する。近年は気温が安定して推移せず、着色の開始時期が年により変動し、気温が高い年は出荷時期が遅れることがある。着色する気温の条件が明らかになれば、着色開始時期を判断できると考えられる。そこで、ハボタン「ウインターチェリー」を用い、着色する昼温及び夜温の条件を調査した。

1 夜温の影響の調査

20℃/5℃、20℃/10℃、20℃/15℃（昼温/夜温、昼間は7～17時）の条件で着色を比較した結果、20℃/5℃では温度処理開始12日後、20℃/10℃では16日後から着色が認められたが、20℃/15℃では着色しなかった（図1、写真1）。

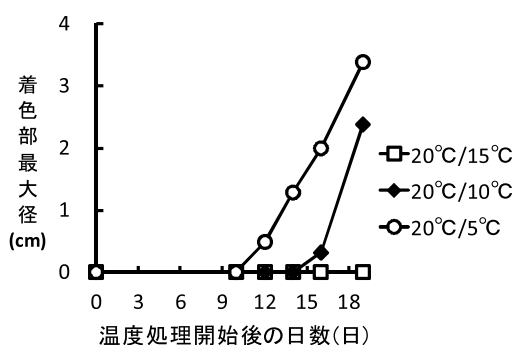


図1 夜温がハボタンの着色に及ぼす影響



写真1 夜温によるハボタンの着色の違い
(左から 20℃/5℃、20℃/10℃、20℃/15℃ (昼温/夜温))

2 昼温の影響の調査

15℃/5℃、20℃/5℃、25℃/5℃の温度条件で着色を比較した結果、20℃/5℃では温度処理開始11日後、15℃/5℃では16日後に着色が認められたが、25℃/5℃では着色しなかった（図2、写真2）。

以上のことから、昼温20℃以下、夜温10℃以下が11日以上続くと着色することがわかった。また、昼温と夜温の両方が下がるが必要で、夜温のみの低下では着色しないことが明らかとなった。

今後の方針

昼温の高温を抑制することにより、着色を早める技術を検討する。

水谷 祐一郎（農産園芸部）

(問い合わせ先 電話：0790-47-2424)

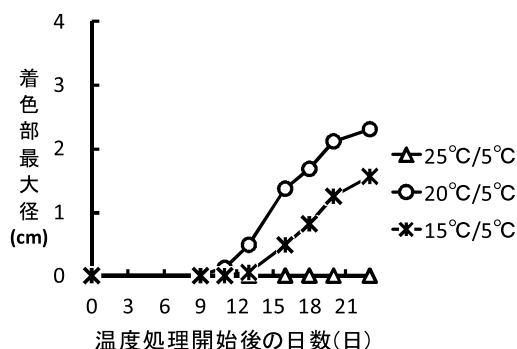


図2 昼温がハボタンの着色に及ぼす影響



写真2 昼温によるハボタンの着色の違い
(左から 15℃/5℃、20℃/5℃、25℃/5℃)